

現代シニア用語事典

## 「人生九〇年時代」を生きることば

堀内 正範 著

元『知恵蔵』編集長

堀内正範著

『**丈人のススメ** **日本型高齢社会** **「平和団塊」が国難を救う**』（武田ランダムハウスジャパン刊）を

項目別に編集・補足

「丈人」⇨「三世代多重型社会」を達成する「支える側」の高齢者。「丈人力」⇨丈人層が保持する生活力。大丈夫！の気概。 「平和団塊」⇨平和の証としての「日本高齢社会」達成の中心になる戦後（一九四六～五〇年）生まれの一〇〇〇万人の若き高齢者層。

25x17 2012. 11. 01 稿

### ◎目次

- #1 「人生65年時代」の「二世代+2型社会」をどう生きる
- #2 高齢者意識と家庭内の高齢化対応
- #3 家庭用品の「途上国化」と「国産化」
- #4 新スグレモノと企業再リストラ
- #5 日本再生と地域の四季
- #6 **人民・市民・国民・国際人として**
- #7 「人生90年時代」の「三世代多重型社会」をどう生きる
- #8 おわりに ひとりの「昭和丈人」として

## #6 人民・市民・国民・国際人として

＊・＊＃ 有史以来という「少子・高齢化」＊・＊

### 「総人口減少」

### 「少子・高齢化社会」

EUや日本など先進諸国でひとしく明らかになってきた「有史以来の少子・高齢化」というのはどういう事態で、高齢者にとっては何が問題なのか。文字どおりの意味からすれば、生まれる子どもの数が減り、相対的に高齢者の比率が増し、その高齢者がこれまでより以上に長生きをする事態ということになる。推測では他の途上国も次第に「高齢化率」が増してゆくという。

わが国の人口統計によれば、二〇〇五年の一億二七七七万人をピークにして二〇〇六年からは「総人口減少」に転じた。「総人口減少」の事態に対して国は将来の活力維持のために「少子化」に歯止めをかけねばならず、若年者支援の細かな対策を自治体や企業の現場に求めている。

る。また経済のグローバル化の波に遭遇してアメリカや途上国の活力に対応することになった現役世代の人びとの関心が「高齢化」を置いて「少子化」に寄って、若者中心の暮らしを優先することになっている。企業もまた採算を急いで、製品の主軸を若年ものに移している。

先進国が史上はじめて迎えた「少子・高齢化」という事態を、わが国は「少子化」と「高齢化」に分けて対処しようとしている。これでは「少子・高齢化社会」にはならない。ここでの大事な点は、これまでとは異なる構造の社会を登場させるにあたって、三世代がともに関連しあっており、とくに高年者が主体者として現役で暮らしているという体感をもてるかどうかにある。

### 「過剰高齢人口」

### 「役に立たない高齢者」

現状のままの社会を保持すればいいという立場の人びとの中には、日本の人口は減ったほうがいいという意見

がある。明治のはじめには三〇〇〇万人であったが、大正のはじめには五〇〇〇万人に、戦後直後は七〇〇〇万人に、そして昭和四二（一九六七）年には一億人に達した。一〇〇年で三倍になったことになる。その間に急激な人口増加による「過剰人口」（厚生白書）への対応が政策課題とされたころもあったのだから、「過剰高齢人口」という事態は同様に政策課題として避けられないというのである。

そういう逆風を察した高齢者の側は、後人に迷惑をかけることなく、静かに生きて介護を受けずに死ねればいい、と願って暮らしている。そんな高齢者が事故や急病でぼっくり死んでくれると、資産は即座に次世代にもたらされる。日々のやりくりに苦しい中年層にとって、それはアリガタイことなのだ。本音は次世代に「役に立たない高齢者」の急死は歓迎なのである。不幸な情景だが、「何もしない高齢者」の存在が後人に歓迎されなくなっている。そんなことはあつてはならないが、それを知

らなくてはならない。

当事者である高齢者の存在が「少子・高齢化社会」の形成のために役に立っていない。いまがどういう事態で何をすべきなのかを高齢者の側がわかっていない。なにもしないで同じ場所にいるつもりが、後人にめいわくな方向へ流されているのだ。

### 「三世代同等型社会」

単純化しすぎると異見を生じるが、こう考えてみよう。いま暮らしている社会構造をいまの現役である中年世代の人びとのものとして置いてみる。その上で新たに子どもたちの居場所と自分たちの居場所を多重化して作り出さねばならないのである。青少年世代との共有の場。それが新たな「第三期の人生」のためのステージとなる。いまある社会構造に重ねて、「少子化」と「高齢化」をつなぐ新たな社会構造を高齢者の活動によって多重的に形成することで、「三世代同等型社会」の動線が実現する。

これが有史以来という「少子・高齢化」に対応する高年者側からの「構造改革」なのである。

いまある「中年世代」中心の社会構造をたいせつにしながら、「高年世代」が活動することによって、「三世代」がそれぞれに「多重標準」を意識してさまざまな場を形成していくことが肝要なのである。「少子・高齢化社会」への推移のなかで、高年者と青少年が主体的に発揮する潜在力は大きい。社会が高齢化する時代にあつては、高年者が現状のまま何もせずに過ごすわけにはいかないと知るべきなのである。

「次世代育成」の事態に対しては、子どものことから対策は若年層にまかせればいいとはならない。高年者は二重丸の外丸の位置にいて子育て環境の改善を支援すること、つまり「高齢化」と「少子化」との双方に関わる視野での活動が求められている。

「少子・高齢化」の事態はいわれて久しく、なお進行しつつづけているが、高年者側からの顕著な動きは見えない。

したがって高年者の存在基盤はなおろいままなのだ。

一回きりの人生のかけがえのない高年期を、三世代がともに暮らしやすい新たなステージ「三世代多重型の社会」の創出にかける。そういう目標をかかげた「現代丈人層」の人びとの着実な活動からはじまり、そういう日々を送る人びとの活動の総和として持続可能な「日本高年化社会」は引き寄せられるのである。

＊・＊「高齢化率が世界一に」＊・＊

### 「実感ない高齢化率世界一」

なんで日本が世界一なのだろう。喜ぶべきところだが、個人的には世界一などという実感はない。この国にはいま高年期（ここでは六〇歳から）を過ごしている人びとが三九〇〇万人いるのだが、そのうち「世界一の高齢社会の体現者」であることを意識している人はどのくらいいるだろう。みんな毎日あくせく暮らしてきただけなの

に世界一になった。「実感ない高齢化世界一」である。

国の担当者にいわせれば、欧米に追隨して学んできて、高齢化率が世界一（二三％）になったのだから誇るべきであって何が不満なのですか、ということになる。衛生に、食生活に、とくに医療に力をそいできた国の施策におおいに感謝することしよう。しかし追隨は「最高の模倣」までで、評価も後進国の先進的能力までで、範として学んで対応してきた北欧型あるいは欧米型の「福祉型高齢社会」がいまや現実に対応できなくなっていることを知らなくてはならない。だから欧米諸国は、高齢者率世界一のわが国の新しい「日本型高齢社会」の姿が知りたいのである。高齢者が後人の敬意を受けて、日また一日を充ち足りて過ごしている「長寿社会」の形成を期待しているのであって、借金づけの「社会保障」での追隨はめいわくなのだ。高齢者が「丈人（Jojin）」を意識して過ごすことによって、次世代も明るい展望をもつ「日本型長寿社会」にすることができると。ここまで大胆

にいえば「高齢者世界一」である。

### 「世界最速で高齢社会に」

日本の女性が生涯に産む子どもの数（合計特殊出生率）が総人口を支える二・〇八を割ったところ、すでに一九七〇年には「高齢化社会」に入り、一九九四年には「高齢社会」に、そして二〇〇七年には「超高齢社会」（本格的な高齢社会）に達したことになる。国際的な「高齢化」時代のなかで、わが国は「高齢化社会」（一九七〇年に六五歳以上が七％以上に）から「高齢社会」（一九九四年に六五歳以上が一四％以上に）となるのに二四年だった。フランスの一五年はともかく、イギリスが四七年、ドイツが四〇年というから極端に短い。その後わずか三三年の二〇〇七年には「超高齢社会」（本格的な高齢社会、六五歳以上が二一％以上に）に達している。一億人の人口をもつ国としては稀有の例なのである。

一九九九年の「国際高齢者年」のあと新世紀を迎えて、

国際的にも注目されている「日本型高齢社会」への関心の醸成や達成への取り組みについて、なすことなく一〇年がすぎた。そんなことは知らなかった」といっても、そうなのだからしかたがない。個人には感じようがなくても、それを知っている国としては、「日本型高齢社会」へのブランド・デザインを示して、高年者のみなさんに参画を求めるべきだったのである。

### 「アジア地域で「国先進高齢化」

アジア地域でどこか世界規模で「国先進高齢化」を成し遂げて、いまそれを体現しているわが国の高齢者、とはいうものの、これまでのところでは、本来はさまざまに繰り広げられるはずの活動、高齢者が保持している知識・技術・資産を活かした高齢化活動といったものが少なすぎる。みんなが「社会の高年化」を体現しているという実感や共感を持つことができないでいる。

それはなぜか。

いうまでもなく「ブランド・デザイン」がないからだ。

衆知をあつめて構想せねばならず、それを推進するのは国のしごとであり、国には高齢者の代表としてふさわしい専任担当大臣が内閣府に座していなければできないことなのである。その職務は、アジア地域でどこか世界規模で「国先進高齢化」を成し遂げたわが国が代表しておこなう誇るべき責務でもある。

当たり前のことなのに、遺憾ながら現状はなおそういう方向に向いていない。一九九五年の「高齢社会対策基本法」制定以来の担当大臣のリストは、恥ずかしくて外には見せられない。

### 「高齢社会対策専任大臣の不在」

最近の「高齢社会対策」の担当大臣を見てみよう。毎年出されている『高齢社会白書』（内閣府）をみると、二一年度版は野田聖子大臣が、二二年度版は福島みずほ大臣が、そして二三年度版は蓮舫大臣が閣議決

定時での担当大臣となっている。連ねてみると明らかに「少子化・高齢化」を合わせ担当することでの人選であり、兼任でも「少子化対策」が主だからだ。

組閣時に「高齢社会対策担当大臣」として辞令が出ないために、組閣後の記者会見でも関連する質問が出ることがない。蓮舫議員と替わった岡田副総理もその時機を感じていない。

ゆゆしき事態なのだ。「日本型高齢社会」の形成は、その体現者である三〇〇〇万人（票）の高年者の参画による歴史的挑戦なのに、国はその高年者の遇し方を知らないでいる。「共生社会政策」の一分野として内閣府政策統括官（共生社会政策担当）として村木厚子さん、「高齢社会対策担当」の参事官や政策調査員がいるが兼務だったりするから、「高齢社会対策」を担う太い動線が内閣府に整っているとはいえない。主な職務として扱われていないのである。

「高齢化」を一過性のものとし、「少子化」を恒常的なもの

のとする施策は、この国の将来を二重に誤ることになる。

### 「お仕着せユニバーサル・デザイン」

#### 「ゴムひも型高齢人生」

政府は新世紀を迎えた二〇〇一年に「高齢社会対策大綱」（二月、閣議決定）を見直しして以来、一貫して「ユニバーサル・デザイン型」の考え方を基本姿勢にして、「健康現役社会」を提唱し、「エイジフリーの勤労環境」や「七〇歳まで働ける企業」の推進などに努めている（『高齢社会白書』から）が、中心課題としては六〇歳が主だった定年を段階的に延長させながら六五歳の年金受給までの期間を、企業の努力と合わせてつなぐという政策上のつじつま合わせ（「高齢者雇用確保措置」）をしてきた。その努力を否定することではなく、注意しておきたいのは、それが現状を引き伸ばした「ゴムひも型お仕着せ人生」（エイジング）に高年者を押しとどめることになってしまふ点にある。

高年期になって新たな領域（しごと）を力づくで開拓しようとする人びとの想像力や気力を萎えさせてしまう。これがすべてとなってしまうのはこの国は弱体化し衰弱する。本稿はそういう意味合いで「ユニバーサル・デザイン」の人生全体への傘かけに異議を唱える。

またこんなレベルにこだわっているかぎり、「長寿時代のグランドデザイン」に手のつけようがないからだ。

一九九九年の「国際高齢者年」のあと、この国のありようをつぶさに観察してきた本稿は、このままの推移では「団塊の世代」の定年後が穏やかな老後にならないことを予測してきた。それが実感されるまでは発言しても受け入れられないこともわかっていた。独自の「五階層ステージ」を提案しているのには、はっきりとした理由があるからである。みんなが「お仕着せユニバーサル・デザイン」に従うとしよう。するとここで課題として「存在感のある日本高年化社会」の創出を担う主体者が見当たらなくなってしまうのである。

## 「グローバル化という途上国化」

アジア唯一の先進国であったわが国は、途上諸国中心の「グローバル化」という激流に遭遇して、若年化・女性化・ＩＴ化を優先する対応（七〇〇〇万人による「青少年・中年化社会」へのリストラ）を急いだ。その結果として「社会の高年化」を体現している五〇〇〇万人の人びとを軽視し、明るい展望を示すことができず、蓄積してきた能力を引き出せない。それどころか身の丈にあまる赤字国債をかかえて解決への方途を見失ったこの国の政府は、大戦後の復興と繁栄を成し遂げた功労者から、いろいろな手立てを講じて資産の「びっぺがし」をした上で放り出さざるをえなくなる。先の戦乱時に民衆を戦場で放り出して「みずから生きよ」とした国家は、再び同じ災禍への道をたどろうとしている。真つ先に災禍をこうむるのはだれか。「グローバル化という途上国化」の激流に遭遇して、若年化・女性化・ＩＴ化を優先する対



応のはざまで存在感を薄くした高齢者層である。「順風満帆」に迎えるはずであった高年齢期の暮らしは、いまや「逆水行舟」といった状況に陥っている。

### 「高齢社会日本型モデル」

「日本高年化社会」は、五〇〇〇万人の高年者ひとりひとりによる意識的な活動なしには成り立たない。その活動が顕在化する前に、行く先の総体的な姿を推察するのはむずかしいが、この国にどういう変化をもたらすか。それは行く先明るい展望でなければ意味がない。大胆に推測してみよう。一〇年ほど先の二〇二〇年（昭和二〇年生まれの人びとが七五歳に達する）ころまでの内輪な推測としてだが、「超人〇〇兆円」の財政赤字の解消、つまりプライマリーバランスは、「高年化社会経済」の推進によって大幅な縮小ができるであろう。「アジアの先進国」として途上国が範とする日本でありつづけるであろう。「少子化」に歯止めをかけ、有職子育てで繁忙な女性

を支援できるであろう。「好事は門を出ず、悪事は千里を行く」というような風紀の乱れを阻止できるであろう。「高年化社会」を形成し、「高齢弱者」の暮らしの不安を払拭できているであろう。これだけでも「現代丈人層」の登場による「社会の高年化」のすばらしい成果ではないか。国際的にも注目され納得されるような「日本高年化社会」の形成は、総体としてのグランド・デザインとそのプロセスを開示しながらすすめられる。それはいずれ高年化を迎える途上国にとって、「先進高齢社会日本型モデル」としてのとなるべきものである。

### 「全世代型社会保障」

世界最速で高年化がすすむわが国の「高齢社会」は、わが国独自の経済、文化、伝統のもとで、独自のプロセスを案出しながら形成される。史上まれな「少子・高年化」社会に対応する史上まれな「高齢社会」は、五〇〇〇万人（五〇歳以上）の高年者がそれぞれに持つ経験・

知識・健康・資産を、高年期の暮らしのために活かすことで次第に形成される。その総体のありようが「日本型高齢社会」なのである。

これまでの医療、介護、福祉、労働ほかさまざまな分野でなされてきた「二世世代+α」(福祉社会型を越えて、政府はやつと「全世代型社会保障」を持ち出したが、注意すべき点は、高齢者のためではなく、高齢者のためばかりでなくという方向性をもつ発議だということである。「青少年」「中年」「高年」各世代がそれぞれに暮らしやすい多重標準の「三世代同等型」社会として達成に向かうためには、その体现者である高齢者自身が「人生の第3ステージ」を現役としてどう過ごすかによって決まる。存在感を増すことである。

### 「アクティブ・オールド・アダルト」

グローバルな「若年化と女性化と途上国化」という潮流のなかで、政府は二〇〇一年に「高齢社会対策大綱」

(一二月に閣議決定)をまとめ、多様なライフ・スタイルを可能にする高齢者として「活動的な高齢者」(アクティブ・オールド・アダルト)を登場させた。アダルトがややあやうい外来語なので、無難な「アクティブ・シニア」が使われることになる。三つの類型とした残りのふたつ、「二人暮らしの高齢者」と「要介護等の高齢者」は、すでに政策課題として長い経緯をもっている。

「高齢化」をみずからの問題として主体的に担う人びとの登場である。「団塊の世代」の人びとも年々に加わっている。高齢期を迎えて、みずから定めた目標の達成をめざして暮らしている人びと。

しかしこれは別項で詳しく述べるが、政府のいう「活動的な高齢者」は「ユニバーサル・デザイン型」のうちに閉じ込められている。もう一步、「高年者による高年者のための高年化社会」の実現を主体的にめざす活動的な高齢者となれば、本稿の「敬愛される高年者＝現代丈人像」に重なってくる。

## 「敬愛される高年者像」

ここで「日本高年化社会」の形成の主体者を「丈人」と呼ぶ。「丈人」ということは本稿のわか造語ではなく、れっきとした古語だということである。古語の意味合いを援用して、これから本稿に登場する「現代丈人」の持つ新たな意味合いを重ねて現代に生かせればいいと思う。古語の意味合いでは、「丈人」には「尊老」というニュアンスがあつて、だから例えば「狐丘丈人」といえば、狐丘（地名）の長老ということを意味した。長老とまではともかく、豊富な知識や経験や技術・技能や健康や資産を活かして、青少年・中年者からうらやましがられるような人生を送る高年者といった意味合いで理解できればいい。要は有史以来といわれる「少子・高齢化」時代に見合つた高年者、「敬愛される高年者像」としての内容を盛ることができて、過ごしてきた青少年期・中年期よりはひとつ上の高年期を切り開いている「高年者Ⅱ

丈人」が、ほかの誰でもない自分だということを意識するための用語として納得していただければいい。

杖は持つても持たなくても、「いよう、丈人！」と呼びかけるにふさわしい高年者の姿を、街なかに数多く見かけるようであれば、国際的に誇れるような「日本高年化社会」など形成できるわけがない。ひとつ上の優れた生活感性をもつ高年者にふさわしい独自の「モノと場」を構成して、若い女性やIT青年とともに高年者が時めて暮らしているのが「成熟にむかう日本社会」のありよう、近ごろはやりの表現を借りれば「持続可能な（サステイナビリティ）社会」のありようなのではないかと、まず手始めに納得しておきたいのである。

＊・＊熟成期を共有する「シニア文化圏」＊・＊

## 「シニア文化圏」

本稿では「丈人力」や「三世代のステージ」などと

もに、「シニア文化圏」ということばを、強い把握力をもつ高年期キーワードとして位置づけている。

といっても現状のところでは、内容となるコア（核）は確かな感触でつかみとっているが、その奥行きも広がりも漠としたままになっている。広く理解されて成熟するとともに、やがて大小の水玉模様がどこまでも広がりをもちあうような印象の波紋を形成するという成長予測をもつて期待していることばなのである。

そこでここでは、コア（核）となる意味合いを述べることになる。

「シニア文化圏」というのは、「人間五十年」を過ごして、それぞれに個性的にわが道での業績を積み上げてきた高年者が、異なった成果を得た人びとと出会い、お互いに見ずからの経験や業績を語り合い、高年者同士でなければ味わい得ないレベルの理解を共有することを目途として集まった場（高年期の文化ステージ）、といった程のところだろうか。

少し排他的に言えば、「利」を望まずに、あるいは望んでも優先せずに、「文を以って友と会す」といったところ。加えていえば、ここでは「青少年（ジュニア）」や「中年（ミドル）」の存在を脇に置いて、おとながおとなの「文化を語って文化を生じる場」といったほうが分かりやすいかもしれない。そう気づいていないだけで、すでにさまざまな形で存在しているわけだから、とくに新しいことを言い出しているわけではない。ここではそれを高年者意識の視点から捉え直すこと、これは「シニア文化圏」だと意識することで、高年化社会のなかにそれぞれに個別な特色をもつて重なった水玉模様のような印象の存在として見えてくればいいのである。

### 「シニア文化の内容」

語られる「シニア文化の内容」とはどういうものか。「環境」とか「文化」というと、どうにでも広くも狭くもなるが、狭く考える必要はないだろう。学術的な領域

から芸能・スポーツ、暮らしの知恵に至るまで、人為万般にわたってみんなが共有しているもつとも広い意味での「文化」のイメージでいい。少し限定するとすれば、五〇歳を経た高年期にある人が関心をもって考え、語り作り、表現した事象・事物を主に対象とする、というところぐらい。

たとえば五〇歳で亡くなった夏目漱石の『心』や『明暗』、若くして自死した芥川龍之介（三五歳）の『侏儒の言葉』、三島由紀夫（四五歳）の『天人五衰』などは、若い日の濫読時代とは違って五〇歳をすぎた立場からの読み込みによって新たな発見がなされるはず。

同時代人として、吉本隆明さんのような並みならぬ思索の根っこを持つ人の、かつて妥協のない立場がぶつかり合った一九六〇年代の状況下で、ロゴス（統一法則を内包することば）の混乱にまきこまれながら柔軟で示唆的であった『共同幻想論』などから、思索の根っこを裸形のまま曝した『老いの流儀』などの新作にいたるまで

の、中年期と高年期の作品を合わせて採り上げてみるのもおもしろい。また『蓮如』を書いた五木寛之さんの新作、古代インドの「四住期」から想をえて現代の高年者の第三の人生のありようを説く『林住期』も、個人の生き方の事例として理解されるのもいい。みずからの長年の思惟の到達点から発して試みられた井上靖さんの『孔子』や瀬戸内寂聴さんの『釈迦』といった史上の人物についての作品は、作品批評まで含めて、さまざまな角度から語り合える素材となる。

### 「親族シニア文化圏」

### 「学友シニア文化圏」

文化圏の「圏」としての大きさは、どうだろう。

テーマや参加する人にもよるだろうが、「最小規模の多数」である七〜一人といったところが基本だろうか。不可能とはいえないが、四、五人では少ないために「文化」を生じるための変則や異見といった要素を含み込めない

し、また多すぎると散漫になる。

メンバーが多い場合には七〇―一人を代表発言者とし、テーマや時間を限って質疑などを通じて全員が参加するシンポジウム方式が有効のようである。

わかりやすい例としては、多くの会議や学会の総会そのものも高年者が中心の「シニア文化圏」ではあるが、むしろその後の「二次会」のほうを基本型と考えたらどうだろう。二次会なら談論風発、結論を出す必要もなく、話題はさまざまに移っていく。ひとつのテーマをめぐる場合もあるが、意見が二つに割れたり三つになったり、二つの話題が混ざって語られたり、また一つにもどったりする。その自在性の中に「最小規模の多数」による発見と味わいがある。

高年者同士が自由自在に「文化を語って文化を生じる場」が「シニア文化圏」であり、高年期の人生の成熟とともに実感しあえる愉快な「高年期のステージ」なのである。小規模で静かに開かれている「……先生を囲む会」

などは、おだやかな老師を中心にして、「如座春風」（春風の中に座しているよう）というにふさわしい「シニア文化圏」として、参加者を暖かく包んで成立している。それぞれの立場で、いろいろな「シニア文化圏」に属していることに気づく。

冠婚葬祭の折りに、親族が集まる場で「シニア同士」で話し込んでみると、思いもよらない発見があるものだし、「親族シニア文化圏」といったものを意識し直すこともできる。同様にクラスメートとの「学友シニア文化圏」も長く親しい。同窓会では生涯にわたる絆をもった何人かの学友との出会いを経験しているだろう。

### 「地域シニア文化圏」

#### 「職場シニア文化圏」

地域の知りあいとの「地域シニア文化圏」、職場の同僚との「職場シニア文化圏」、仕事での知人、ネットのウェブ・サイトで知り合った人びとも「シニア文化圏」とし

て意識してみる。やや広がりをもったクラブ・同好会などはまさに「シニア文化圏」の典型といえる。ゴルフ、釣り、碁・将棋、郷土史、俳句ほかスポーツや趣味の仲間もまた改めていうまでもない。だれもがいくつもの水玉模様の重なりに似た「シニア文化圏」を大切にして暮らしている。

高年期になって親しくつきあえる人といえば、だれでも「学友」と「同僚」と「親族」の三点セットのうちに、幾人かの信頼する相手をもっているだろう。しかし実はこの三点セットだけでは長い高年期の人生を充足して送るには心もとないのである。心もとない理由は、どれも高年期になって自らが選んだものではなく、与えられた環境下で得た人びとであり、外に閉じた仲間だからだ。高年期に心躍る人生の充足を得るには、さらに地域や目標とする分野からあらたに加えて五つ七つの「シニア文化圏」での活動が、高年期の人生に変化と厚みのある成果を刻んでいくことになる。

### 「日本シニア文化圏」

といって、参加者がそれぞれの立場で自在に活動していればいいことだから、「シニア文化圏ネット」といったヨコ幅を広げる組織化を急いだりすることもない。それぞれに自立した「シニア文化圏」が多種多様に活動し合い、お互いに存在を意識し合いながら豊かな「日本シニア文化圏」が総体として成り立っていればいいのである。極端に閉じすぎた組織では先がないが、引退シニアであるSさんのような「引きこもり」にはいった人びとの一見、閉ざされた仲間うちの「閉鎖的シニア文化圏」もまた座位を少しずらした自律的な「シニア文化圏」として、その存在が理解されてくる。高年化社会の現役として、ともに熟成した豊かな人生のひとつときを共有して過ごす。それなくして何の人生か。

「シニア文化圏」だからといって「青少年」や「中年者」を排することではない。中心になる構成メンバーが高年者

であり、中心テーマが高年者を対象とするものということであって、とくに将来の成員である中年の人びとには開かれたものでいい。ほどよいほどの「シニア文化圏」の存在が、一人ひとりの「第三期の人生」の充足と重なるであろうことは確かである。

## #「日本社会の高年化」に投じる

＊・＊この一〇年は高年者不在だった＊・＊

### 「高年者意識の未熟」

### 「モノと場の高年化」

新世紀のこの一〇年を、じっくり振り返る余裕は持ちづらいが、ひとつだけ、この一〇年余のあいだ、なぜ「高年化への対応」がないがしろにされてしまったのか、についてだけは触れておかなければいけないと思う。お互いに深い自省をこめて。

高齢者が多くなるだけで「社会の高齢化」が進み、社

会のしくみが成熟するわけではない。高齢者が多くなる「高齢者社会」と高齢者が暮らしやすくなる「高齢化社会（その成熟した姿が「高齢社会」）では異なる。本稿が願うレベルの「社会の高年化」は、すでに実感できるようになっていなければならないのである。なぜなら日本社会は国際的基準ですでに「高齢社会」（高齢者率一四％）を迎えているからである。この一〇年ばかり、高齢者はみんなふたつの面での成熟に留意する必要がある。ひとつは一人ひとりの「高年者意識の成熟」であり、もうひとつは「モノと場の高年化」の達成である。当事者である高齢者層が努めなかったのだから、どちらも半熟どころか未熟のままなのである。

### 「シルバー・デモクラシー」

### 「共生の論理」

この一〇年ばかりを顧みて、先駆的に高齢者の自立を呼びかけた論考や活動はあったものの、広範な大衆レベ



ルで「高年者意識」を共有することができず、したがって身近な「モノと場の高年化」を推し進めることができなかった。「シルバー・デモクラシー」(内田満さん)や「老人党」(なだいなださん)といった論考や活動を記憶している人はあるだろう。内田さんは「納税者デモクラシー」(中年)と「年金受給者デモクラシー」(高年)とを区別した上で、予見される世代間の対立を避けるためには「自分がその木陰で憩うことがない樹を植える」(W・リップマンのことば)という「同時代の異なる世代に属する人びとへの配慮」を不可欠のものとし、高齢社会のデモクラシーの成立を、「共生の論理」にもとづく民主政治への構想力に期待していた。

### 「高齢者は社会の被扶養者」

新世紀を迎えて、国際的課題である「高齢社会」へむかって、その体现者である健丈な高齢者層に参画を呼びかけねばならなかった時に、当時の小泉純一郎首相は「所

信表明演説」(二〇〇一・五・七)で何といったか。

あるうことか、将来の「ケア」における負担増だけを取り上げて、「給付は厚く、負担は軽くというわけにはいきません」と言い放つありさま。首相ばかりではなく、それがおかたの国と為政者の意識であった。その後も国は高齢者に将来への不安を与える政策を次々ととりつけてきた。「高齢社会」にむかう時代だからこそ、「給付は厚く、負担は軽くだけは、何としても保っていきたい」と訴えて、国の財政難を説きつつ、国民に「自助と自律」を求めるのが政治リーダーの発言というものだ。

これは記したくないが、「心優しい高齢者が善意で死に急いでくれて、日本高齢化社会は思いのほかスムーズに形成できました」なんて海外発信するのでは、来たるべき国際的な「高齢化時代」を構想する時、「先進高齢者国」としてあまりにつらすぎるではないか。善意の高齢者が、「この国の将来の姿はもう見たくない、早く死にたい」とつぶやくような国を、だれが望んだらう。弁解も反論

の余地もない。この国のこの一〇年は、何かがじわりじわりと狂ってきたとは思えない。

国は「高齢者は社会の被扶養者である」と位置づけた施策では国際的評価をえ、平均寿命では世界一となっている。その間に「日本高齢社会」のブランド・デザインを模索する動きがなかったわけではない。何より新たな社会構造を要請する主体者としての国民（高年者層）が不在である状況のなかでは、霞が関官僚の間での政策ベクトルの総和が、結局は高齢者は「社会の被扶養者」と位置づけるところに引き戻されてきたのである。年々の『高齢社会白書』の記述の変化ににじみでているが、不在であるものへむかつては踏み出せない。それでも高齢者への医療・介護・福祉のしごとは十分にあり、年々の予算規模は増大しつづけてきた。この一〇年は「高年者不在」であり、高年者の主体性のなさが、国の政策の不在を許してきたのである

＊・＊二〇二〇年には四人に一人が高齢者＊・＊

### 「高齢者二五％時代」

国の先進性の指標のひとつとして「高齢化率」（六五歳以上の人口比率）の国際比較がある。これまで久しく高かったヨーロッパ諸国を追い抜いて、アジアから日本が二〇％に一番乗りをして、国際的な「高齢者二五％（四人に一人）時代」にむかつて先駆けをする。

そして二〇二〇年。

ヨーロッパ勢のイタリア、ギリシャ、スイス、フィンランド、スペインなどがトップ・グループを形成して続々と「高齢者二五％（四人に一人）時代」に達するとき、アジアの日本がフロント・ランナーとしてさらにその先をトップで通過する。ヨーロッパ勢のあとを追って、途上国の高齢化も進んで一〇億人を超えるという（世界保健機関WHO推計）。そして二一世紀のなかには前記したように、途上国を含めて世界中が「高齢化問題」に

直面することになる。

## 「二一世紀日本型モデル」

### 「日本ベビーブーマー」

わが国はトップ・グループを形成している「高齢化先進国」のうちでも、アジアでひとつであり、最速スピードで高齢化が進んでいるといわれる。国際的に「社会的混乱を起こさない手法での問題適応力に優れている」と評価されている日本は、アジアでひとつの先進経済国での高齢化社会として、「二一世紀社会の日本型モデル」として注目されているのである。ということは、二一世紀初めの二〇年ほどは「日本シニア」のありように国際的スポット・ライトが当たっている時期であり、国際ステージでも期待されている時期なのである。

アジア代表として世界のトップへ躍り出る「日本高齢化社会」には何が期待されているのか。

いうまでもなく高年者がそれまでに蓄積した技術や知

識や資産を自在に駆使して、いきいきと暮らしている姿であり、それを支える「モノと場」の豊かなありようだろう。

世界一〇億人のシニア世代の前に、日本の高年者による「日本高齢化社会」は、日本型モデルとして立ち現れることになる。そこへ至るプロセスが問題なのである。

これはわが国ばかりでなく、ヨーロッパの先進諸国もまた併走状況のなかで迎えている。ともに二〇世紀前半に遭遇した世界争乱によって多大な犠牲をはらったあと、両親は心から「戦後平和」が長くつづくことを願いながら子どもを生み育てた。日本の戦後生まれの人びともまた同様に六〇歳にさしかかり、高年期を迎えている。

いま六〇歳の定年期に達してこれから高年期をすごして二〇二〇年には七五歳にたどりつく人びとは一九四五（昭和二〇）年生まれの人びと。そしてそのあとに大戦後の「日本ベビーブーマー」の人びとがつづく。

## 「平和団塊の世代」

ご存じのように、一九四五年の敗戦のあと一九四七～四九年に生まれた七〇〇万人の人びとを「団塊世代」と呼んでいる。同じく二〇〇万人が生まれた一九五〇年と、終戦の翌年である一九四六年を加えると、新世紀を迎える時点では一〇三七万人（二〇〇〇年一〇月・国勢調査）であった。

この一〇〇〇万人の一人ひとりを、敗戦後のきびしい生活環境の中で生み育てた両親の思いを想って、本稿は「平和世代」と呼んで注目している。「団塊世代」では即物的にすぎて、また「平和世代」では理念的にすぎて、いずれも不満であるかもしれないが。あわせて「平和団塊の世代」と呼ばせていただくのをお許しねがいたい。

先進諸国の同世代の人びととともに、平和裏に安心して後半生をすごせる社会を形成し、長寿をまっとうすることが、惨禍と混乱の中で両親が希い求めた「平和に生きる」ことの証しになるにちがいないからである。世紀

を超えた人類の挑戦なのだ。世紀の長さでとらえて、人類の規模でみて、二一世紀に克服せねばならない多重標準の課題といえは「戦争」と「平和」である。二一世紀半ばの「日本国憲法一〇〇周年」のころの国際社会は、「高齢者先進国」の日本の経験を「世界平和の証し」としてスタンディング・オベーションで迎えるだろう。

新世紀を迎えたところには「団塊ジイ、団塊バア」などといわれて「老いるショック」を受けた人びとも、いまはもう驚かない。「日本社会の高年化」の体現者としての自負を持って暮らしている。この「平和団塊世代」の人びとに厚生労働省や大手広告会社に関心を示しつつづけているのは、「日本高齢化社会」の形質を左右すると予測しているからである。

## 「激動の戦後昭和期」

### 「昭和丈人層」

日ごろ個人的に実感されることではないが、わが国の

「高齢化社会」は国際的に、少なくともアジア地域では先行している。シナリオはないものの、その推進役を演じているのは、日々を積極的にすごしている高年者のみなさんである。だが成熟へむかう「日本高齢化社会」がいま形成されているという事情を踏まえて、主役を演じている人びとにスポット・ライトを当てるとすれば、それは「昭和」に生まれて二〇世紀後半の「激動の戦後昭和期」を活動のステージとしてきて、新世紀になつてなお新たな目標をもつて意欲的に暮らしている高年者。本稿がその潜在能力を信頼している「昭和丈人層」の人びとである。

先にも指摘したが、多様多彩な経験を持つている五〇歳以上の高年者を、餃子ではあるまいし混ぜて包んで一様に「高齢者」なんて表現できるものでは決していない。

そこで新たな五階層の「高年化時代の人生のステージ」を示したが、ここでは、さらに詳しく、後半生の日々をすごしている五〇歳すぎの人びとを五年刻みの幅「五歳

階級」でみてみよう。そうすることで決してひとくくりにできない年齢層としての意識・生活感・価値観、時代背景など、特徴の把握が可能になるからだ。個人差はあるものの、ともに刻んできた年輪に特徴をもつ同世代人への理解を広げることができる。

### 「高年者（シニア）文化圏」

### 「高年者（シニア）生活圏」

出会うことで溢れるパワーをあたえてくれる知名の「現代日本文化人」の多くは、激動の「戦後昭和期」を生き抜いてきた経験を共有する人びと、つまり「昭和丈人層」の人びとである。戦戦後のモノ不足も貧しさも、そして復興への努力による成果もみんなのものであった。その中でそれぞれに身につけた奥行きのある人柄と能力は、「ゼロの地点」から出発して、切磋琢磨して獲得した個人の貴重な成果なのである。

いうまでもなく、知られることを求めることなく「社

会の「高年化」を体現して暮らしている人びとが成熟へむかう時代の主役であるが、これほど多くの熟成した力量をもつ人びとが活躍をしているというのに、「高年者（シニア）文化圏」や「高年者（シニア）生活圏」、また暮らしを支える用品・用具、設備・施設などによる「高年化製品経済圏」が、あるべき存在感を示していないのはなぜなのだろうか。

答えは即時にこたまのように舞い戻る。「昭和生まれの高年者層が、意識してあるべき存在感を示していないからだ」と。

### ＊＊湧出する「第三期のステージ」＊＊

#### 「高年者活動」

昭和生まれの高年者層が、あるべき存在感を示していないわけではない。

わが国の「高年者活動」はいままさに湧出期にあつて、

その中心にいて主導しているのは、まぎれもない昭和生まれのみなさんのだから。その全容を把握することができないほどだ。長い苦闘の経緯をもつ高年齢者ケアとしての「福祉」「医療」「介護」の分野はもちろんのこと、高年者活動は、実にさまざまな領域へと広がっており、うまく分類できてはいないが、動きが際立つ分野だけでもこれほどにある。

各種の生涯学習（趣味、生きがい、健康）。

虐待防止、遺言相談。

高齢者雇用、起業支援。

年金、貯蓄・投資、マーケット情報、保険。

シニア向け新商品開発、介護福祉機器・電化製品、車・

乗り物などの製造・販売。

ショッピング、通販、宅配。

ファッション、料理、食品、レストラン、居酒屋。

ケア付き住居、いなか暮らし、住宅改修（バリアフリ

ー）、家具・用具。

パソコン教室・通信、カルチャー講座・セミナー・シンポジウム、イベント。

シニア向け新聞・雑誌、テレビ・ラジオ番組。

短歌・俳句・川柳、ナツメロの会、自分史、楽団、手づくりクラフト。

ゲートボール、テニス、ゴルフ、太極拳・ヨガ、碁・将棋、ゲーム。

環境美化、伝承活動、世代交流。

国際交流、海外ツアー、旅行、ホステル、国民宿舎。

・・・などなどである。

組織の名称はといえば、「シニア」が圧倒的に。「老人」や「シルバー」といった先輩格のものも、しっかりと根をはって活動している。

「老人」ということばは、老練、長老、老師など経験を積んだ高齢者をもいうのだが、どうも旗色がわるいのは、長く「老人ホーム」や「敬老会」などが随伴してきたために「高齢弱者」というニュアンスが働いているからだ。

「敬老」はいまや「高齢者をねぎらう」ほどの意味合いで用いられている。「敬老」には「敬老尊賢」というすつくと立つことばもあるのだが。

### 「老人のつく活動組織」

「老人」については、ここでは新旧ふたつの活動をみておきたい。

旧のほうはなんといっても「老人のつく活動組織」で、代表は「老人クラブ」である。敗戦後間もない一九五〇（昭和二五）年に発足して以来、自治体と連携しながら地域の高齢者の生きがいと健康づくりに貢献してきた。「全国老人クラブ連合会」（全老連）には、一三万余クラブ、約八五〇万人の会員が参加。「友愛訪問」「伝承活動」「環境美化」「世代交流」といった幅広い活動に乗り出している。

新のほうは政治活動をおこなう「老人党」で、精神科医のなだいなださんが、〇三年五月に立ち上げたネット

上の仮想（バーチャル）政党である。「老人のためだけにではなく、この国を改革するために、老人たちに何が出るか、を考える党です」と呼びかけたもの。言動者としての老人パワーによってネット上での議論は白熱し注目されたが、行動者としての影響力は未知数である。

本稿が「老人力」や「老人パワー」に関心を持ち、これまでの活動に賛意を表しながらも、新しい「高年化」の活動にあえて「丈人論」を展開しているのは、「老人」はそれはそれでそつとしておいたほうがいいという立場からである。静かにクールダウンしながら過ごす生き方もあっていい。老人みんなだというのは、いささかキツイ話だからである。といって、みんなが立ち上がらないのはさらに困ったことになるからだ。

## 「シルバー」

### 「アクティブ・シニア」

「シルバー」は、グリーンやブルーといった「アシッド・

カラー」（柑橘類の色）などに対する色彩の比較から生まれた和製語である。

高年者を「シルバーエイジ」としてとらえて、活動的なイメージを付加して、運動・旅行・講座などの研究所や教室が用いている。高年者の能力を活用する「全国シルバー人材センター事業協会」や「シルバーサービス振興会」などは定着している。

ここで確認しておきたいことは、「だれもが」（ユニバーサル）とともに、それよりも優先して「高年者自身のため」を意識した活動であっていいということである。

高年者の活動の湧出期にあたって、さまざまな分野で「アクティブ・シニア」が先行して新しい活動を進めている。そこでカタカナ語の団体・協会が続出している。

「アクティブライフ」は、活動的な暮らしをめざすことで、高年者主体のボランティア・グループが用いている。「ニッポン・アクティブライフ・クラブ」など。



## 「エイジド」

## 「エージング」

「エイジド」や「エージング」などは、それぞれに年輪を刻んで到達した営みが意識されて使われている。

「エイジド」は、ワインやギターやコーヒー豆での利用が優勢だが、経験を積んで熟成した意味で、これも高齢者を支えるボランティア組織やNPOが用いている。

「エージング」は、老化がすすむことを意識して「アンチエージング」として医療や美容外科などに、「ウエルエーシング」や「アクティブ・エージング」として高年期を積極的に受け入れる立場を示している。「日本ウエルエーシング協会」は一九五三年から活動をおこなっている。「エルダー」は、旅好きのおとなのための「エルダー・ホステル」が世界一〇〇カ国に開設されていて、学習と旅をあわせた高年者対象の活動をしているのが目立つ。「日本エルダー協会」や「エルダーホステル協会」など。

## 「エイジレス」

## 「ユニバーサル」

一方に、高齢を意識しながら人生に年齢は無関係であり、それを超えたものであるという意味での「エイジレス」や「ユニバーサル」などが知られる。

「エイジレス」は、年齢にとらわれないという意味で「エイジレス・デザイン」「エイジレス商品」「エイジレス・ライフ」などとして広く用いられている。

「ユニバーサル」は、だれもがという意味合いで、とくに「ユニバーサル・ファッション」が、高年者にも障害者にも快適で喜ばれるファッションとしてバリアフリーが意識されて用いられている。「ユニバーサル・ファッション協会」など。

まだまだあるであろう。ここでやや立ち入ってカタカナ語に触れたのは、高年者活動は、さまざまな方向でそれぞれの立場で熱心に活動している人びとと組織に支えられているからで、どれかひとつとはいかない。それと

ころが多いことはいいことなのである。

### 「高齢化活動団体」

活動の広がりを見るために紹介がカタカナ語に片寄ってしまったが、福祉を核としながら活動している「高齢化活動団体」は枚挙したらきりが無いほど。その推進役になっている組織・団体の存在を見落として先にいくことはできない。ここはその場ではないから紹介をかざるが、福祉・介護の「さわやか福祉財団」（理事長は堀田力さん）や高齢者研究の「東京都老人総合研究所」、高齢者雇用の「高年齢者雇用開発協会」、高齢女性の「高齢社会をよくする女性の会」（代表は樋口恵子さん）、「ねんりんピック」によって活力ある長寿社会をめざす「長寿社会開発センター」、生涯学習の「生涯学習開発財団」、住宅に関する「高齢者住宅財団」・などなど、NGO（非政府組織）を中心にして幅広い活動体を形成している。分野は多岐にわたっており、全容の見極めがつかないほ

どに幅広い。

そして何より心づよいことは、「新現役ネット」「シニア・パワー・ネット」「いきがいの会」など、「高年化社会」の主役を体現しながら活動する組織を支えているのが、先の大戦の惨禍と戦後の混乱を知っている昭和前期生まれの人びとであることである。

### \*・\* 高年化活動への三つの契機 \*・\*

#### 「高年化活動への三つの契機」

この章の終わりに、高年者が暮らしやすい社会で暮らせるようになるためには、どうすればよいかについて整理しておきたい。

座して待つだけではどうにもならない。本稿は先に、ひとつは個人がもつ「高年者意識」を成熟させること、もうひとつは社会構造の「モノと場の高年化」の達成というふたつの成熟の必要性を指摘した。指摘するとも

に参加を要請した。

ふたつの成熟にむかってどこまで参加するかは随意であるが、その活動に身を投じること、かけがえのない高年期の人生に果敢な選択をすることになる。そのために共有するであろう「高年化活動への三つの契機」を抽出して、ここに示しておくことにしたい。

(一)「人生の第三期」を過ごす現役としての高年者意識の確立

(二) 家庭・職域・地域生活圏といった暮らしの場の高年化対応

(三) 風土と伝統に配慮した地域特性を持つまちづくりへの参加（地域の「高年者の生活圏」や地域の「高年者の文化圏」を形成し、発展させる）

の三つである。

## 「高年期現役人生」

### 「丈人モデル型の機能や能力」

(一) は、だれのためでもない。みずからの高年期の人生を滞らせることなく、日また一日を充実したものにする基本である。五〇歳をすぎたころから、「高年者意識」を立てて「人生の第三期」の将来を見据える。その上で自己目標を見定めて達成をめざす。「第二の人生」とか「余生」ではなく、それ自体が「高年期現役人生」として体感されるものにするために丈人意識は有効に働くだらう。いわゆる高年期を生きる「尊厳」は、その上に成り立つ。

(二) は、高齢とともに衰える「老化型の機能や能力」を補助するばかりではなく、高年期を迎えてなお発展、熟達、深化しつづける「丈人モデル型の機能や能力」を支援する「高年化用品」の供給者となり需要者となつて、「モノの高年化」のために努めること。また高年者が楽しんで過ごすことができる「場の高年化」をさまざまに進めること。お互いに「人生の第三期」が味わい深くおもしろいと実感しあえるのが、高年化時代の「構造改革」の成果といえるものではないか。

「わたしは高年期を丈人として生きたよのう」と納得して瞑目する。そういう骨太の人生を送る人びとの力によって、高年者同士をつなぐ「高年者（シニア）生活圏」や「高年者（シニア）文化圏」の基礎が着実に形づくられていくことになる。

### 「職域の高年化」

### 「地域の高年化」

(二)は地道な活動の広がりによる広域での成果である。「高年化」時代を迎えて、職域でも地域生活圏でも、企業や団体や自治体は高年化に対応する態勢、つまり「職域の高年化」や「地域の高年化」へむかう成員の活動を支援する立場にあつていいはずなのに、職場のふんいきも社会の風潮もむしろ逆ではないか。そんなよじれた現実の中でも、「高年化社会」を体現して「人生の第三期の現役にいる」という自覚を持ちつづけることが肝要である。

個人の暮らしにおいて「人生の第三期にいる」という意識をもつということは、職域や地域社会でのありようにおいて、「青少年」「中年」「高年」という三つの世代の存在を常に「多重標準」として意識して対応するということである。これまで共有してきた生活環境はそれとして、青少年が将来の可能性を求めているのびのびと育つ「青少年期のステージ」、国際化のなかで苦闘している中年世代がさまざまな場面で十分に実力を発揮できる「中年期のステージ」、そして高年者が経験と個性を活かして後半生を自在にすごすことができる「高年期のステージ」という三つの世代のための「三つのステージ化」を実現することになる。

(三)にとつて、わが国が幸運といえるのは、戦後の民主主義の根つきを証明してみせた「六〇年安保闘争」や「七〇年学園紛争」といった噴出期をふくむ草の根の市民・大衆運動に、若い日に参加したり周辺にいて体験し、その後の人生経験をふまえて柔軟な思考と行動を自得し

た多くのアクティブ・シニアを有していることだ。人材にはこと欠かない。若い日に「社会参加（アンガージュマン）」して大地を揺るがせた熱い心を呼び覚まして動く。いま高年期に入って、新たな「高年化社会」の形成の場に投じる時、熟成した人びとの活動によって各地に涌くようにして形づくられる地域社会の姿を、心おきなく「成熟にむかう地域社会」と呼んでいいのではないか。二〇二〇年ころには、その総和としての「成熟した日本社会」に出会うことができるだろう。

### #国際評価に耐える日本型モデル

＊・＊高年期の「尊厳」を守りぬく＊・＊

#### 「善く戦う者は怒らず」

#### 「怒と尊厳」

人世のありようを知りつくした東洋の先人は、一個の人間としては人生がかかる、人類にとっては行方がかか

る至言として、「善く戦う者は怒らず」といい切った。

怒りによる戦いによって勝利しても、ほんとうの勝利者にはなれず、新たな怒りを呼ぶだけだということは、だれもが体験として知っていることだ。ひとときの鎮静は得られても、紛争の解決にはならない。では紛争の解決策として、ほんとうの成果を得る極意は何か。怒りでなくて何によって戦うのか。「怒」（いかり、憤懣）ではなく「怒」（ゆるし、思いやり、憂慮）だというのが、ここでの実践者としての覚悟である。

漢字というものの不思議な存在感がここにもある。このふたつの字をよく見てほしい。下に心のついたよく似た文字は、人間の「心」のどこか同じところから発するものである。だから「怒」（「怒」も）と「怒」とは心の中の「多重標準」ということができる。「怒」（いかり）を発しようとするとき、人は「怒」（いかり）ではなく「怒」（ゆるし）として発することができる。漢字をつくり用いてきた先人はそう理解してきたにちがいない。

終章で人生の高年期の「尊厳」（とうとぎ）をいおうとして、「怒」（いかり）から始まったのは、そこに一気にいけないからだ。いまや高年者は「憤懣」を抑えきれないところにいるからである。「怒」については、孔子が弟子の子貢から「一言にしてもって終身これを行うべきもの有りや」と問われたとき、「それ恕か。人の欲せざるところを人に施すことなかれ」と答えている。卒寿期にある「明治丈人」の日野原重明さんも「恕」への思いを述べていた。

本稿ここでは「恕」を「憤懣」を鎮める「憂慮」によるゆるし」と読むことにしたい。わが心のうちの「憤懣」を「憂慮」に転ずる心の働きを、ここでは「尊厳」と呼びたい。お互いがこの一〇年ばかりを傍観してやりすごしてきた自責の思いを噛みしめ、切迫した深い「憂慮」とともに動く。一人ひとりの「憤懣」をみんなの「憂慮」に変えて、五〇〇〇万人の高年者が高年期を、「恕と尊厳」を守りぬいて暮らすなら、舞台は回るだろう。人生終章

の舞台を、みずから「高年化社会」の主役として「昭和丈人」を演じきる。演じるというのは、高年者としての自分を見ている自分の目を意識するということである。

### 「友人フォルダ（玉壺）」

#### 「わがシニア文化圏」

「高年化社会」の主役として「昭和丈人」を演じきるといつても特別なことをはじめようというわけではない。晴れた日には日課として一時間ばかり街に出ようというほどのことである。

街に出て、高年者同士ならだれとも快く気候のあいさつを交わし、お互いの健康を案じあい、愉快に今日を語り合い、先輩の姿を思い起こし、親元を離れた子どもたちの無事を願い、わがまちの将来を思う。お店では新しい「高年化用品」の情報を得て、ていねいな手造りの地産品の手触りを楽しむ。ここは現今の若者たちの風気には染まらない。子どもたちに見た父母たちがそうして

いたように、ひとつ上の境地を共有することといい。

雨の日には家にいて、「旧雨今雨」の友人たちに想いをめぐらせ、訪れを待つ。やれやれと「マイ・チェア」に収まって、しばし音楽に耳を傾け、書物から先人の叡智を得る。さてそれからウエブ・サイトを開いて新情報をゲットし、ネット仲間とメール歓談を楽しむ。

「一片の氷心玉壺に在り」というのは、かけがえのない友に捧げることばだが、「友人フォルダ（玉壺）」の中に、氷のような澄明な心で終生つきあえる友の名が何人も存在しており、さらに一片また一片と増えていくのは愉快なことである。内にも外にも「高年者同士のための暮らしの場」をさまざまに構成し、コクのある「わがシニア文化圏」をこしらえる。そして高年者の生活を危うくする営為には「憂慮」の息づかいを合わせて対抗する。

いま高年者の生活圏を危うくする火の粉は、超八〇〇兆円まで膨れあがってなお増勢のとまらない財政赤字から飛んでくる。ほかに術なくて、高年者がみずから「粒々

辛苦」してつくりあげてきた暮らしの基盤が揺らぐほどに、国は寡黙な高年者にシワヨセを押しつけ出したからだ。高年者は何よりも存在を軽視されていることに対して、怒りを鎮めて「憂慮」の輪を広めなければならない。

### 「世界一の長寿国」

### 「昭和生まれの丈人力」

一国の首相を小論考の狭い行数のなかであげつらうことは避けるべきだから、本稿の立場からの指摘ひとつに止めるが、新世紀を迎えて首相となった小泉純一郎さんは、「自鳴得意」の姿勢を貫きつつ、「構造改革なくして日本の再生と発展もない」といいつづけた。

成し遂げた小泉流の構造改革は「郵政民営化」が象徴的作業となったが、時代の風をとらえたとはいいながら、改革のK点はせいぜいが硬直化した国家機構にかかわる改革までであった。それは内向きなものであって、世論が求めていた外向きの社会改革には及ばず、「高年化社

会」の形成に関しては、新世紀になっても手つかずのままだったのである。

改革の主体者である高年者に参加を呼びかけることをせずには「社会の高年化」は決して進まない。だから小泉改革は高年者の期待とは別の方向に動いてきた。『世界一の長寿国』を喜ぶ」といいながら、次には「高齢者は年金・医療・介護という社会保障の対象」と跳んでしまう。かつて厚生大臣をつとめた小泉さんは旧来の「厚生族」の視点を越えられなかった。静かで目立たない多数派である高年有権者の信頼をつなぎ止めるためには、その存在と動向を正確に把握し、信頼して「参加」を呼びかけなければならない時に、だれの目にも際立つキャリア女性議員と若手議員に国民の目をそらせてしまったのである。

ここで五〇〇〇万人の高年者は「憂慮」の息づかいをそろえよう。てんでんばらばらに怒っていたのでは何も起こらないし、ほんとうの戦いは怒りによって行うもの

ではないのだから。ここは静かに、歴史的役割をわけあって、昭和生まれのみんなが「昭和生まれの丈人力」を惜しみなく発揮して、高年者としての「尊厳」を守りぬいて生きること、で、「日本高年化社会」の形成に投じること。それぞれが過ごしやすいステージを紡ぎだすようにして現出し、後人のスタンディング・オベーション（立ち上がっての喝采）に送られて歴史のなかへと去る。それなくして何の人生か。

### \*\*\*未萌の「高年化社会」に賭す\*\*\*

#### 「家庭内の高年化」

ここであらためて「家庭内の高年化」について整理しておこう。

家庭は「高年化社会」形成のコア（核）であり、ここでの成立がすべての基礎である。さまざまな角度からおこなわれるが、とりたてて特別なことから始める必要は



ない。

すでに記してきたように、時節の基本を一年一二月月に重ねて「四季三カ月」として、「地域の四季」の変化に応じた行事を日々ていねいに迎えてすごす。一日の基本にはこれも二四時間に対して三時間ごとに刻んだ「八方時刻」を多重化して採り入れる。明け方から夜までの活動を三時間ごとに分割してムリなく織り込んで暮らしにリズムをつくる。何より家庭内の三世代がそれぞれのプライベートを納得しあいながら着実に実現する。

「マイ・チェア」から食器まで愛用品を配備して動線で結んで「人生の第三期」を心地よくすごす「わが家の高年期のステージ」を構成する。一生ものの良質な国産の「高年化用品」をとどころに置いて「パパのもの」の存在感を示す。

衣は季節に応じて「和装」を楽しみ、時には「和装街着」で街に繰り出す。高年者同士が街の「四季型中心街」で「丈人登場!」といった元氣な姿で談論する。

食は「男子必厨」を志して、長寿のための自家薬膳料理や四季旬菜をものにする。

住は「四季型(通風)住宅」を指向して、四季のめぐりに対応する暮らしをする。できるなら「三世代同等同居住宅」に住んで娘家族を支援し、孫たちの養育にも当たる。知識、経験、健康、資産などを有効に用いながら、自己目標の達成にむかって過ごし、厳選した友人たちとの「シニア文化圏」で交流を楽しみ、ボランティア活動にも積極的に参加する・などなど。

### 「職域の高年化」

ここであらためて「職域の高年化」について整理しておく。

職域では、「企業の高年化」つまり「製品の高年化」と「職場の高年化」を推進する。

来歴に鑑みて、国内の高年需要者層への新しい製品化が見込める企業から「社内ミドル化」と「社内シニア化」

を指向する。この「新・終身雇用」のもとで、成員がそれぞれの立場で和気藹々として働ける社風を醸成する。

国際競争に直面している「社内ミドル化部門」の中年社員を支援・督励するとともに、生活用品の途上国製品化に違和感をもつ国内の高年者層が納得する「優良高年化製品」を企画し、さらには将来の輸出商品として有望な日本製「高年化製品」の開発も視野にいれて推進する。

「高年社員・社友会議」を成立させ、同業他社と競いつつ業界の存在感を明確にする。各社のベテラン社員と終身の愛社意識をもつ引退社友が、高年者としての生活感覚を反映した良質な「高年化用品」を考案し提案する。企業の永続的な発展と重ね合わせて、新入社員が生涯にわたって愛社意識を保てるような「新・終身雇用」や「新・年功序列」の規定を取り入れ、また医療・厚生施設の充実と保持にも努める・などなど。

## 「地域生活圏の高年化」

地域社会での「地域生活圏の高年化」についてもこころで整理しておこう。

高年世代としての経験と構想力を発揮して、地域の「青少年」「中年」用のステージに加えて「高年者」用に特化した「ステージ」の形成に努める。専門領域をもつ人びとが参加した「地域シニア会議」が高年者の課題を話し合うとともに、「三世代会議」をつうじて子どもたちに地域文化・物産を伝承する。とくに子育て期の女性を支援し、さらには内外の姉妹・友好都市からやってきた青年・高年者に「国際交流員」として応対する。

地域の中心街には日課として出向いて、高年者仲間とともに地域の「四季型中心街」の活性化を担う。自治体の「高年（生涯）大学校」や地元大学の「シニア大学院」で、高年期の暮らしのためのスキル・アップを心がける。地域の四季をたいせつにし、地域の「自然環境」や「生活・伝統環境」を守る活動に参加する。伝承として残る手づくり技術を活かした「高年化地域特産品」の創出活

動の先駆けをする。そして「高年化用品展示会」や「昭和の日」の行事にも積極的に参加する・・・などなど。

### 「10・1 国際高齢者の日」

国際的には「10・1 国際高齢者の日」に一年の成果を公表し、世界に発信する。

国際的といっても、とくに海外の目を意識する必要はない。日々の活動による「高年化社会」への参加と過程そのものが、ノウハウとして国際標準のひとつになるのだから。

前世紀に体験した国家同士による戦争の惨禍を負の資産として、「平和の絆」として提携した姉妹・友好都市との交流から、手づくり技術を生かしたアイデアを得て、途上国製品のひとつ上のレベルの日用品を考案することで、「国際平和の証しとしての高年化」という次の目標に備える。日本の高年者が獲得した「モノと場の高年化」に関するノウハウは、海外の高年者の関心を引くとともに、

に、優れた日本製「高年化製品」への需要を呼び起こし、国際的な「高年者製品経済圏」の形成に先駆的な役割を果たす。「国際高齢者の日」には、さまざまな分野の成果を公表する。そして「一生に一度はいつてみたい日本」を現出する・・・などなど。

### 「昭和中期丈人層」

### 「昭和前期丈人層」

史上にまれな「少子・高齢化」時代に遭遇した「昭和生まれの高年者」としての歴史的役割は、なるべく「ケア」を受けないですむ「自立」の姿勢を保持しながら一日でも長く生きることである。「からだ・こころざし・ふるまい」という三つの「いのちの多重標準」をつねに意識して、「ひとりの高年化」を体現しながら「高年化社会」を安定させるのが、「昭和丈人層」の歴史的役割なのだ。国政の担当者から発せられた「痛みをとまなう改革を」ということになれば、実際には弱者の犠牲を前提とせざる

るをえないし、成果はの上にしか成り立たない。失政のはてのそんな愚直な訴えを聞き、そんなたわけた社会をつくるために高年者は苦闘してきたのではない。

「昭和丈人」のみなさんなら、怒りをこらえて憂慮の声を発するだろう。

「国民自身の『痛みをともしなわなない改革』によって、日本高年化社会の形成は着々となされることとなるのだ」と。そして行動派の高年者であるみなさんが、たしかな高年者意識を持って過ごした「第三期の人生」での総和が、「高年化社会」の日本型モデルとして、近い将来には国際的な評価を受け、次世代の資産になる信頼を勝ち取るにちがいない。

二〇二〇年に、国際的な注目をあびて高年期を迎えているのは、だれだろう。

「敗戦」（一九四五・昭和二〇年）の年から「エキスポ70・大阪万博」（一九七〇・昭和四五年）の年の間に生まれた「昭和中期丈人層」である人びと。「日本らしさ」を

活かして成し遂げた成果を、参観のため来日した外国人高年者に示すのは愉快な役割ではないか。そして先駆者として力を尽くした「昭和前期丈人層」であるみなさんの輝かしい体験記とともに、二〇二〇年に、書棚にあってその成果を見定めたいというのが、本稿の実現目標2020である。

＊＊春爛漫の「(仮)シルバー・ウィーク」＊＊

### 「敬老の日」

### 「老人の日」

きょうはなんの祝日だったつけ。二〇〇三年からは九月一日であった「敬老の日」は、九月第三月曜日に変更されたからなおのこと、実感に乏しい祝日となった。

「ちよっと待ってください。わたしたちは少ない予算で必死にやっているのですから」

先回りした善良な官僚の悲鳴にも似た反論が聞こえる。

社会に尽くしてきた功労者として高齢者をねぎらい、顕彰することは後進の者の当然のつとめ。お年寄りを敬いたわる日があることは…。

べつに「なくても良い」といつているわけではない。ねぎらわれ、いたわられる「高齢弱者」（被扶養者）を設定し、善意を率直に表現できる「敬老の日」があることは、だれもが納得していることである。前年度プラスの予算を確保して、熱心に「敬老行事」をすすめてきたのは、だれがみても良いことである。しかし、官製の敬老には納まらない多数の高年者（予算に関係ない人びと）から「敬老の日」は次第に遠くなってしまったのではない。年々に「敬老行事」を予算化することではないことを固定化し、そこから先の発想の広がりと可能性を殺してきた。

現行の爽やかな秋の「敬老の日」は、公的にでなければできない高齢者への施策を中心にした善意の日として、「老人の日」（九月一五日）を合わせ支えながら継続する。

それとともに、一〇月一日の「国際高齢者の日」は、国際的な行事の日として、「国際高齢者交流会議」といった海外の高年者が参加する行事の開催にあてる。そうすることで高齢化先進国であるわが国の活動が、国内ばかりか国際的にも関心を呼ぶことになる。

## 「昭和の日」

### 「（仮）高年者週間」シルバー・ウィーク

春ののどかな一日、「こどもの日」や「母の日」と同じように、高齢者が高齢期の人生をどう切り開いているかを、年々のその日に確認する日、「高年者の日」があつていい。

「いい時代に、いい人たちと出会った」というのは、脇役の名優笠智衆さんの残したことだが、そう率直に言つて、終生を脇役として地味に生きてきたお互いを賛嘆しあう日があつていい。後人にねぎらわれるのではなく、後進の者を安心させ、激励を与え、将来の目標になるよ

うな健丈な高齢者のための、「(仮) 高年者の日」シニア・デー」(四月二八日)を設定しようというのは、出版人Mさんの着想である。歴年で祝うには、季節もよく活動するにもよく、記憶するにもよい日がいい。早めに一日を確保しておくことにしよう。

翌四月二九日が〇七年からは「みどりの日」を改めて「昭和の日」にかわった。丸ごと高齢者のための日とはいかないだろうが、「昭和の日」もまた「昭和の人びと」のための日とすれば、高齢者が二日間にわたって主役をつとめることになる。家庭で、屋外で、津々浦々で、高齢者が元気な姿を示しえたら愉快ではないか。

そして五月五日の「こどもの日」までを視野にいれて、世代をつなぐ活動の成果を公表すれば、いきいきとした厚みを増すことになるだろう。さまざまな「J(ジュニア) + S(シニア) 会議」や「三代代(JMS) 会議」が、五月五日までの間に開かれることになる。

たとえば日本の誇る「国際人シニア」である小沢征爾

さんが主宰している「ジュニアのための音楽塾」のような、熟達者と新進の若者が芸術の高いレベルの成果に挑戦するような世代をつなぐ活動は示唆的である。また「憲法記念日」(五月三日)での大江健三郎さんのような作家と子どもたちとの定点对話は、憲法をテーマに、表現力によって深く伝え、想像力によって理解を堅固にするこの大切さを知る出会いとなるだろう。

春の「ゴールデン・ウィーク」に先がけて、高齢者の存在感を示す一週間が「(仮) 高

年者週間」シルバー・ウィーク」である。「高年齢者週間」シルバー・ウィーク」として、みんなで勝手気ままに高齢期の成果を示すステージを作りあげていくのもいい。

行事はさまざま。各地・各分野で、技能や芸能を磨きあげ、経験を積み、知識を深めてきた人びとを、企業や民間団体が紹介する。代々に引き継がれてきた伝統芸能や技術、話芸、ライフワークを追い続けている研究者の

成果を実演・講演する。高齢者スポーツ大会、健丈度・活動能力診断、ウォークラリー、金婚・銀婚・賀寿を祝う会、そして全国や地域の「高齢者用品展示会」・などなど。そのために高齢者は健丈であること。

### 「平均寿命世界」

#### 「国別健康寿命世界」

世界保健機構（WHO）が「国別健康寿命」を初めて発表した（二〇〇〇年六月）。「平均寿命」が年齢ごとの死亡率から計算されるのに対して、「健康寿命」は平均してどの年齢まで健康で暮らしているかを示すもの。

その計算式によると、一九一調査国のうち日本は「平均寿命」では八〇・九歳で「平均寿命世界一」だったが、それより六・四年短いものの七四・五歳（男七一・九歳、女七七・二歳）で「国別健康寿命世界一」だった。ちなみに二位はオーストラリアで七三・二歳、三位はフランスで七三・一歳。インドは五三・二歳で、アフリカ諸国

の中には三〇歳台というところも少なくない。長寿世界一の「日本シニア」が、いよいよ注目されることになる。

### # 平和の証としての「日本高年化社会」

\*\*\*何もしない「国際高齢者の日」\*\*\*

#### 「国際高齢者年」

新世紀を迎える地球規模での「高齢化社会」を予測して、国連が一九九九年を「国際高齢者年」(International Year of Older Persons)と定め、そのテーマを「すべての世代のための社会をめざして」としたのは一九九二年のことだった。

世紀末近くにそんなことがあったことを知っている高齢者がどれほどいるだろうか。善意の提唱者が、テーマを「すべての世代のための社会をめざして」としたのは、世代を越えた人びと（エイジレス）の賛同と参加を期待したためであつたらう。しかし「すべての」という呼び

かけは、それが提唱者の善意の期待からであるとしても、活動の主体者をあいまいにしてしまうことは否めない。実際には活動を強める力とはならないのである。

活動の中心となるのは、世紀の初頭に高年期を迎える人びとであり、最初に迎えることになる先進諸国であり、なかでも大型で最速で進む「日本」が台風の目となる立場にある。そういう明確で強烈なメッセージが、九〇年代から新世紀にかけてのこの国に、警鐘にも似た強い風圧として横なぐりに叩きつけられていれば、いまこの国で高年期を迎えている人びとの「この一〇年」の取り組み方も、その結果も大いに異なっていたと推測されるのである。

そう主張した人びとがいた。が、そうはならなかった。「国連中心」といいながら、「分担金は多く実践活動は少なく」の実態がここにもあったのである。

## 「国際高齢者の日」

### 「高齢者のための国連五原則」

各国とくに先進国から新世紀を迎えることになる「高齢化社会」にむかつてスムーズに移行できるよう、国連から次々に取り組みが提案され、九〇年代を通じた国際的テーマとなっていたのである。

毎年の一〇月一日を、「国際高齢者の日」と、国連が定めたのが九〇年であり、運動の展開への願いを込めて、

自立 (independence)

参加 (participation)

ケア (care)

自己実現 (self-fulfilment)

尊厳 (dignity)

という五つの「高齢者のための国連原則」を採択したのが九一年であり、そして「高齢者に関する宣言」とともに九九年を「国際高齢者年」と決定したのが九二年のことだった。わが国も総務庁を中心に各自治体も参加して全国的な活動を展開した。現在の高連協（高齢社会N



G O連携協議会」が結成されたのもこの時である。それに先立つ九五年には「高齢社会対策基本法」も制定されている。だれあろう、毎年一〇月一日の「国際高齢者の日」に、他国に先んじて実質を与えるのは、この国の高年者の役割だったのである。

### 「新世紀ふたつの課題」

#### 「高齢化国際人」

二一世紀初頭の国際的な潮流は、先進諸国が先行して迎える高齢化に対処する「社会のグローバル化」であり、アメリカ一極下で開発途上国が中心になって推進する「経済のグローバル化」は新たな時流であり、アジアで唯一の先進国としてのわが国が取り組む「新世紀ふたつの課題」だったのである。この間、ヨーロッパ諸国はソビエト崩壊後の混乱期にあったからなおのこと、わが国がこの新世紀初頭のふたつの国際的テーマを引き受けて総力をあげて立ち向かうポジションにあ

ったことは確かである。

とくに高齢化へのわが国の対応がそうならなかったからといって、よその国からとやかく責められることではなかった。しかし、知らなかったからといって許されないのが日本の高年者自身なのである。

一九九九年の「国際高齢者年」をひとつの契機として、新世紀へむかって「日本高年化社会」への構想が提案され、高年化対応の具体的な取り組みが九〇年代から新世紀にかけて次々になされていたなら、高年者意識もまた広く醸成されていたことだろう。自治体によっては先駆的に「高齢者憲章」を定めたところもあったのだが、全国的な活動にまでは進まなかった。団体でも個人でも国連の高齢者原則の五つすべてでもひとつでも意識して活動することが「高齢化国際人」なのである。

九〇年代を通じて、高齢者みんなが「わたしの高齢期」を意識し、みずからの暮らしを充足させる家庭や地域生活圏の「モノと場」の高年化のために活動し、国産の「高

年化用品」や用具、設備や施設を要望し実現させていたならば、企業や組織は「高年化対応のリストラ」にも努めていたことだろう。そして新世紀を迎えてさらに着実に推進されていたなら、わが国のとりわけ高齢者があらゆる局面でシワヨセを受けてこれほどの苦難を強いられることにはならなかったのだ。

### 「高齢者憲章」

### 「高齢化に関する世界会議」

一九九九年、この国の「国際高齢者年」は主役不在のまま過ぎていった。国も自治体も音頭をとったが、肝心の高齢者自身がわがこととして理解しなかったのである。国際的に先頭に立つべきわが国の活動は際立つこともなく、総務庁（当時）を中心に組みまれ、高齢者関連団体NGO（非政府組織）と連繫しておこなわれ、淡々と過ぎていった。高齢者年NGO連絡協議会による「高齢者憲章」（補注）が、九九年九月に発表されている。

二〇〇九年は一〇周年に当たった。それすら知っている高年者は少ないだろう。

国際的な活動としては二〇年ぶり二〇〇二年にマドリッドで「第二回高齢化に関する世界会議」（第一回は八二年にウィーンで）が開かれた。「高齢化に関する国際行動計画2002」を採択し、世界の多くの地域で平均余命が伸びたことを人類の大きな成果とし、世界的に前例のない人口転換が生じていること、二〇五〇年までに六〇歳以上の人口が約二〇億人に増加し、人口比率では二一％に倍増する見通しであり、すべての国に対して、「高齢者が潜在力を発揮して生活のあらゆる側面に参加する」ことができるような機会の拡大を要請した。

この一〇年、この国に世界の高年者にむかって誇らしく発信できるような「高齢化社会のグランド・デザイン」などなかったことは、すでに何度も指摘したとおりである。

＊・＊日本発・世界平和へのメッセージ＊・＊

## 「平和と非暴力」

### 「文明間の対話」

二一世紀の国際社会が、なお平和裏に推移するかどうかはわからない。国連は、新世紀が「平和と非暴力」にむかうことを願って、「文明間の対話」を課題とし、二〇〇一年を「文明間の対話年」としたのであった。ところがそれに逆らうように、ニューヨークの「九・一一テロ事件」、そして〇二年三月の「イラク戦争」を引き起こし、報復テロの恐怖が世界を覆うことになってしまっている。アメリカ国民は初めて身近に戦争の恐怖を実感したことになる。

そんな中で、日本は「人道支援」という名目で自衛隊を海外の戦場へ送り出した。アメリカの軍事戦略に沿って、アメリカとともに国際的には孤立化の危険をはらむ道を選び、新たな「有事の時代」へと動き出した。その

ことは、為政者がどういつくろつてもまぎれようもない事実であり、「憂慮」すべき事態なのである。それでも一兵も失うことなく、現地の人びとに受け入れられて作業を遂行できたのは、「平和憲法」をもつ国からの「自衛隊」だったからであり、イラクはもちろん国際的にもそう評価されていることの実証例となったのである。

世界をまきこんだ未曾有の戦乱期を経て得た平和期がつづいて半世紀あまり。その間の日本の「平和」が、アメリカの軍事力の傘ととくに沖縄の人びとの重い負担に頼ってきたこともまたまぎれようもない経緯であるが、国民の一貫した強い意志を置いてほかにない、そしてその向こうには、戦場となったアジアの国々とそこに暮らしている人びとの戦乱と戦後の経緯があったことを忘れてはならない。いまグローバル化という時流に乗って、アジアの人びとが日本のような平和のもとでの豊かな暮らしを夢みて過ごしてきていま実現している姿を、先の戦乱の犠牲者を思いながら戦後の復興に身を挺して尽力

してくれたわが国の先人の姿に重ねて、アジアの将来のために心からの謝意をささげるべき時なのである。

### 「ものづくりに優れた国民」

#### 「和を愛する国民」

一九四五年に敗戦国となって以後の日本が、半世紀をかけて努めて獲得した国際的な評判はふたつある。まずは平和裏に、みんなが等しく享受できる良質の製品を、ユーザーの利便性を思いつつ力を合わせてつくることで経済復興を成し遂げた「品質の優れた製品をつくる産業国」であり、「ものづくりに優れた国民」としてである。そしてもうひとつは、戦禍への道をふたたびたどらないために、被害者であり加害者であった双方の立場を包摂して国際社会に「恒久平和」を宣した「日本国憲法」をもつ「和を愛する国民」であることである。かつて欧米列強国と覇権を競ってアジアの隣国に被害をもたらした加害者となったことを反省し、一方で原爆による唯一の

被爆被害者として近代兵器の脅威を経験して、「戦争放棄」をきちつと守りつづけてきた「平和に徹する国」であり、それを守りつづけるとともに敗戦の焦土から立ち上がって粒々辛苦して働き、平和裏にみんなが等しく享受しあえる繁栄を築いてきた「戦後日本人」のたゆまぬ営為によるものであった。したがって、そのプロセスは「人類標準」ヒューマン・スタンダード」となりうるものである。日本に対するふたつの国際評価、「品質のいい日本製品」と「平和を愛好する品格のある日本人」像は、半世紀の積み上げによって作られた貴重なものである。

#### 「日本国憲法」

#### 「日本高齢社会」

平和な時代が長くつづくことを、先人は、「戴白の老も干戈を見ず」（髪が白くなった老人さえ戦争を知らない）といつて、長い平和の時期をすごすことができた幸運を伝えている。と同時にそれはまた、戦乱の不幸が途絶え

たことがなく、人間同士の対立の解決がいかに多く武力によつてなされてきたかを思わせる。人類にとつての最重要課題である多重標準は「戦争」と「平和」なのだ。

先の大戦から半世紀余り、この国の戦争を知っている人びとの髪は、大方は白くなった。そして日本は「有事に動く」という意味では「干戈を見ず」に過ぎしてきた。二〇世紀の「戦争の惨禍」を先人が引き受けてくれたことで得た貴重な平和の期間。

その平和期を実感しながら「戴白の老」となった高齢者が、自分たちの手でつくりあげた生活環境で憩い、往時を顧みて衣食住にもほぼ満ち足りている姿がある。「世界一の長寿国」であり、長寿者が敬愛されている姿こそ、なにより世界に誇つていい「平和の証し」なのである。理念としての「日本国憲法」（とくに九条）を掲げつつけるとともに、現実の「日本高齢社会」の形成が、ふたつながら新世紀初頭の国際社会でなすべき日本の貢献なのである。

## 「世界平和へのメッセージ」

### 「平和憲法施行一〇〇年記念」

「恒久平和」を掲げた日本国憲法は、「原子爆弾」という人類をも破滅させる可能性をもつ武器が登場した先の大戦で亡くなった人びとへの「哀悼のモニュメント」（歴史的記念碑）であり、とくにその九条は先人の心火によって燃えつづけている遺言の灯ともいうべきものである。半世紀を越え、新世紀を迎えたいま、その経緯を確認し、党派性を排して「衆議」して引き継ぐべき貴重な文化遺産である。したがって「そのまま残すべきもの」である。

国際紛争は絶えることなくつづき、世界の軍事技術は仮想敵国を想定しながら自己増殖をつづける。それは朝鮮戦争、ベトナム戦争、イラク戦争で、その恐るべき一端をみせつけた。局地戦はいまも絶え間なくつづいている。そんな悪夢を押し止めるのが、大戦後に平和を託されて生まれたベビーブーマーである「平和団塊の世代」

の人びとを中心にして体现する「日本高齢社会」なのである。それがそのまま「世界平和へのメッセージ」となることに希望がある。

先の大戦によって被害者となり加害者となるに至った戦争の惨禍への経緯を繰り返さないために掲げた「日本国憲法」を改変する能力も立場もないことを、想像力の深度も構想力の精度も足りない現代の若手政治家に知らさねばなるまい。日本がどういうプロセスを踏んできたかの論議を尽くすにはいい機会だが、自分が納得できるレベルの認識で改憲を実行しようとすれば、必ず過ちをおかすことになる。

憲法は今ある人びとのためのものではあるが、今ある人びとのものではない。

「自主憲法」と称して根幹を傷つけるとすれば、先人も後人に対しても、これほど恥ずべき行為はない。いま確認すべきことは、憲法の条文の文言の改変をおこなうことではなく、条文の裏に燃えつつけている「先人の心

火」を感得し、その地点から戦争の惨禍を想起する想像力を培うことである。若手政治家が謙虚になすべきことは、平和を希求する憲法の趣意を「国際世論」とするためになお努めて、四〇年のちに「平和憲法施行一〇〇年記念」を国際平和のもとで祝えるように保ちつづけることである。国会での議論がどのようになるうとも、最後に国民投票での決定権をもつ国民として、冷静にかし先人の心意を確かめながら見守りつづけることにしよう。

国際的に先行してたどる「日本高年化社会」形成への歩みを、「世界平和へのメッセージ」として対置すること。天年（天寿）を全うする一人ひとりの高年者の日また一日の生命の灯を、戦争への兆しがあるかぎりひたすらに歴史を貫いて流れる「不戦不爭の叡智」に託して「戦争放棄・恒久平和」の明かりとして灯しつづけること。「日本国憲法」が放つ不戦不爭の明かりが途絶えたとき、わが国はまた半世紀を積んで得た国際的評価を閉ざし、歴

史的な輝きを失うことになる。耳をすまして過ぎこし百年の声を聞き、目を見開いて来たるべき百年を見透かせば、おのずと明瞭なことである。

**＊・＊・「寿終正寝」(天寿)を全うする＊・＊**

### 「不戦の武力」

### 「能戦の文化力」

国民が穏やかに生き、天年(天寿)を全うできる「寿終正寝」を願わない国などない。

国際的に「高年化社会」の姿を競うことが、二一世紀が「平和の世紀」であることの証しとなる。だから世界の高年者がわが国に期待するものは、紛争地に支援に向かう部隊よりは「恒久平和」を掲げた憲法の下での「日本高年化社会」の実現であり、その形成へいたるプロセスである。古来わが国は「君子の国」として、「譲るを好みて争わず」と伝えられてきた。とはいえ「自衛の力」

は独立国であるかぎり、可能な範囲で他に劣らない質を自ら保持して常備しないわけにはいかない。常日ごろ訓練によって養った、他のいかなる国にも依存しない自衛のための「不戦の武力」と、常日ごろ鍛えあげて相手をねじ伏せるほどの外交のための「能戦の文化力」と、それを支える「経済力(民力)」とは、常に整え備えるべき三位一体の「国民力」なのだから。

個人としては、歴史にまれな平和の時代に、「日本高年化社会」を構成するひとりとして加わり、みずからが充足して長く生き天年(天寿)を全うすることが、そのまま国際的な信頼を引き継ぐ「平和へのメッセージ」となることを確信することである。そして生涯の最後までお互いを支えあうことが主体者としての「現代丈人の証し」ともなる。

### 「高齢者憲章」

### 「丈人と平和」宣言」

前述したが、高年化時代の課題を集約し、活動への参加を呼びかけたものとしては、「国際高齢者年」の一九九九年九月に、高齢者年NGO連絡協議会（現・高齢社会NGO連絡協議会 J A N C A）が発表した「高齢者憲章」がある。（補注）

国連が新世紀を迎える国際的な高齢化社会へのスムーズな展開への願いをこめて掲げた「高齢者のための国連五原則」にのっとり、「尊厳」「社会参加」「社会貢献」「健康づくり」「まちづくり」「社会保障制度」「生涯学習」の七項目に分けて提言を行っている。基本文献のひとつである「高齢者憲章」の提言を引き継いで、NGOを中心に活動は広がりを見せているが、「社会の高年化」にはなお力およばない。

津々浦々の大地から沸き立つように、ひとまわりもふたまわりも広範な「昭和丈人層」の人びとが奮い立たなければ、この国の「高年化社会」は現実とはならないのである。

本稿はこれまで述べてきた内容をまとめて、ここに平常心のうちに『丈人と平和宣言』を掲げる。アジアの人びとにむかつて確認し、未来の世界の高年者にむかつて集うべき「平和の証し」として掲げる。（補注）